法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

座談会 東条勝洋著「木曾・王滝『官』の村から」(信濃毎日新聞社編『民が立つ』所収)をめぐって

TOJO, Katsuhiro / MORI, Hiromasa [Moderator] / YAMAMOTO, Kenji / KANEKO, Masaru / 山本, 健兒 / 森, 廣正[司会] / 東条, 勝洋 / 金子, 勝

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
76
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
61
(終了ページ / End Page)
119
(発行年 / Year)
2008-09-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004901

【座談会】

東条勝洋著「木曾・王滝『官』の村から」（信濃毎日新聞社編『民が立つ』所収）をめぐって

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

開　催：2008年７月13日（日）　14：00〜17：00

場　所：法政大学市ヶ谷校舎　ボアソナードタワー19階
　　　　経済学部資料室

参加者：東条　勝洋（信濃毎日新聞社記者）
　　　　金子　　勝（慶応義塾大学経済学部教授）
　　　　山本　健兒（九州大学大学院経済学研究院教授）

司　会：森　　廣正（法政大学経済学部教授）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

【はじめに】

森　今日はお忙しいところを長野とか九州とか，金子さんもご多忙なところをおいでいただいて，誠にありがとうございます。

今日は2008年度，森嘉兵衛賞の座談会です。森嘉兵衛先生は法政大学経済学部を1929年に卒業され，その後，岩手大学の教授をされ，多くの研究業績等を残された立派な方です。経済学部同窓会ができて，同窓会の創立を記念して森嘉兵衛先生の学風にふさわしい業績がある方には森嘉兵衛賞を授与しましょうということで，1993年に設けられました。それからもうかなりたちます。

私も14回目，２年前にもらったものですから，そういうこともあって今回，司会を担当するように言われました。よろしくお願いいたします。

この本ですが,『民が立つ－地域の未来をひらくために－』という本の中の一部分にルポ「木曽・王滝『官』の村から」が１部から５部まであります。ここを東条勝洋さんが書かれていて，この業績に対して森嘉兵衛賞が贈られました。

【自己紹介から】

それでは, 最初に簡単に自己紹介を東条さんからよろしくお願いします。

東条　東条勝洋といいます，信濃毎日新聞社にいます。大学を卒業したのは96年で，その後，早稲田の大学院を経て，98年に信濃毎日新聞社の報道部に，地元では信毎と言われていますが，就職しました。

長野県は全く初めてでこの会社に就職したのですが，それから今，まる10年たちまして，この春までは長野本社の報道部にいましたが，４月以降，伊那支社という，長野県南部の上伊那地方を取材している記者になっています。

今回の森嘉兵衛賞は非常に光栄で，在学のときには，まさかこういうものをいただくとは夢にも思っていなかったのですが, 励みになっています。とりあえず，そんなところです。

森　ありがとうございました。では，金子さん。誰でもご存じだけれど。（笑）

金子　金子です。東条さんが在学しているころ，ちょうど地方財政論を教えていたのかな。（笑）

東条　そうです。

金子　何も貢献できないでいて申し訳ないなと思いますけれども。（笑）

2007年に，『食から立て直す旅』という岩波書店の仕事で中山間地のルポをやっていまして，今，東条さんがいらっしゃる上伊那地方も出てきます。今年（2008年），『地域切り捨て』という本を出しまして，2000年ごろからずっと，地方にかなり繁く足を運んで回っています。

というのは，実態として2007年７月の参議院選挙で，地方の投票者の反乱が一斉に起きたのですが，なぜそれが起きたのか，普通の人になかなか分からない。全国紙は，農村部ではほとんど売れていませんので，農業を切り捨てるような記事を平気で書いていくわけです。

それから，全国のテレビ局，全国放送のキー局は，視聴率の調査はせいぜい地方の中核都市程度なので，地方の実態はほとんど伝えないし知らない。地方の新聞社あるいは地方のテレビ局は，実態をある程度知っていても全国になかなか発信できない。あるいはうまく位置づけられないということが起きています。そういう問題意識から，実際に何が起きているのか現場にもう一回立ち返ろうと思いまして，2000年ごろからそういうことをずっとやっています。最近は医療，介護の施設を見て回っております。そういう本も出しています。

もう一つ，学問的に

経済学のモデルを考え直す必要があるのではないかという問題意識です。とくに，新古典派的な思考を持っている人がモデル的に考えたことが全然現実に当てはまっていないし，制度も知らないし，ほとんど説明力がなくなっている。それが政策をサポートするのですが，結果としてはほとんど裏切られてしまう。所期の効果も上げないし，多くの人の反発を買ってしまうという結果になっています。しかし果たして，反発する人々が愚かなのだろうか。最近はそういうことを一生懸命に考えているわけです。

森　今やっていらっしゃる活動とご研究が中心でしたが，元法政の経済学部にいらして，現在は慶應大学の経済学部の先生をされていらっしゃいます。

では，次に山本さん。

山本　山本です。現在は九州大学経済学研究院の教員で，担当科目は産業配置です。2006年３月末まで，法政大学経済学部に勤めていました。この座談会に私が参加する理由は，東条君が法政大学経済学部の学生であったときに，私のゼミに東条君が来ていたからであると思っています。

思い出話をひとつさせていただきます。言うまでもなく東条君は，私のゼミの卒業生の中で最も優秀な学生の一人でした。実は私のゼミに来た学生の中で印象に残っているのが何人かいますが，入り方に関して印象に残っている人の一人です。

僕の記憶では，それがいつであったかはまだ思い出せないのですが，大教室での授業を終えて，ドームの下のたまり場的な場所に出てきたら，東条君が僕のところへやってきて，僕のゼミに入りたいんですけれどいいですかというふうに聞いてきたことを覚えています。

それは正規のゼミ募集の期間ではなかったように思いますが，そういう形で僕にアクセスしてきた学生はもう一人いるんですが，要するに24年間法政大学で働いていた中で，そういう形で僕のゼミに入りたいと言ってきた人はたった二人しかおらず，東条君はそのうちの一人です。

それから，東条君は体調を崩したために法政大学に５年間在学していた

んですが，卒業するときには私はたまたま法政大学の在外研修員でドイツに行っていたために，彼の卒業の面倒をみることができませんでした。それは大変申し訳ないと思っています。その一方で，法政大学に在学しているとき，大学院を目指してもいいのではないかということを言ったような記憶がうっすらあります。

３月に私はドイツから帰ってきましたが，早稲田大学大学院経済学研究科に進学し，農業経済の勉強をするという便りをもらったことがあって，大変いいことだなと思いました。しかも，正規の院生になる前に青森県だったか北海道だかに，早稲田の大学院のゼミの先生に連れられて現地調査をやるのだということも，その手紙にしたためられていたことも覚えています。

翌年の1997年４月から，私がたまたま早稲田の経済学研究科に非常勤で行くことになって，行ったらひょっとしたら会えるかもしれないと思っていたら，本当に東条君が同じゼミの院生も連れて，私の授業を聞きに来てくれたということもあり，大変ありがたいことだと思っています。そんなようなつながりが私と東条君との間にあります。

その後，彼が信濃毎日新聞に勤めたということも聞き，どうしているだろうと時々思っていたところ，あるときにふとこの「木曽・王滝『官』の村から」の新聞の連載記事のコピーを送ってきてくれて，いやあ，すごいな，これを一人で書いたのかと思ってびっくりして読んだのです。読んだら，出だしのところはなかなか読みにくかったのですが，しばらく読んでいったらやめられなくなって一気に読むということで，こんなすごいものを書くとは偉いなというのが私の第一印象でした。

同時に，これだけのことを書ける実力を東条君が身につけてくれたことを大変うれしく思っていますが，多分それは法政大学でも早稲田でもなくて，おそらく信濃毎日新聞記者として数年間働く中で鍛えられてこういう取材ができ，かつこういうことを文章に書くような能力を身につけたのだろうなというのが私の推測です。あとで聞かせていただければありがたい

なと思います。

森　では私の自己紹介は簡単に。私は金子さんが慶應大学，山本さんは九州大学, 私はずっと法政大学に今も残ってしこしことやっております。（笑）担当は社会政策論ですが，山本さんとはドイツのGastarbeiterの研究ではかなり前から業績をやり取りして，1980年代ですか，そんな経験もあります。

信濃毎日新聞ですが，私はドイツの外国人労働者問題をやっていて，その後，日本のこともやるようになって，日本でも1980年代の終わりから外国人労働者問題をマスコミでも非常に取り上げるようになった。その頃に，いろいろな新聞社がルポで報道します。

毎日新聞がジパングという報道をして，あのころはパスポートの偽造とか女性を連れてくるとか，かなりブローカーが暗躍しているようなところを黄金の国のジパングにアジアから来るということで,『じぱんぐ』という本にルポをまとめて出した。これが89年です。朝日新聞も『近くて近いアジア』，これも89年に出しています。その後，毎日新聞がもう一つ『第三の開国』というのを出した。このころ信濃毎日新聞が,『扉を開けて』というルポルタージュをまとめて本にして出しています。副題が「外国人労働者の生活と人権」ということで，明石書店から出しています。今はかなりこういう関係の本を出している出版社ですが，この『扉を開けて』は，第39回の菊池寛賞を受賞しています。

朝日，毎日，読売がその後『揺れる労働開国』という本を92年に出しますが，各新聞社の本を読んでいて，私は信濃毎日新聞の『扉を開けて』が一番すばらしいと思ったんです。なぜかというと，人々はなぜこういうことが起こるかという根底を見ていない。日本さえよければいいという視点で問題を解決しようとしている。必要なのは，日本の社会が閉鎖的である点を改めていかなければいけない。そして異文化の人たちと接してお互いに理解して，共存していく社会をつくることなんだ。こうした点は，今みんな言われていることなんです。今，言葉は違うけれど，共生だとか多文

化社会だとか言っているでしょう。この頃から出されているんです。それで信濃毎日新聞には非常に好感を持っていて，今度，この本を読んでみて，山本さんも言いましたが，最初読みにくかったんです。年代が飛んだり，いろいろな人が出てきて，そしてまた飛んで年代が入ってくる。だけど，じっくり読んでいったら非常によく分かるんです。本当に大変なんだということが非常によくわかったものですから，ぜひ勉強させてもらえればと思います。

これで自己紹介は終わって，実は増田壽男先生も座談会に来ていただく予定でしたが，３月末に法政大学の総長になりまして，今日は学長会議が京都であるので非常に申し訳ないんだけれども休ませてもらいたいということで，残念ながら今日はおいでいただけないことをご容赦いただきたいと思います。

【現地に居住して　取材活動】

森　ということもあって，増田先生の講評がここにあります。お配りしました。非常に丁寧に参与観察の手法というのでしょうか，現地に住民票まで移して，そして10か月間そこに住んで，そこのコミュニティの一員として生活しながらいろいろな人に接触して取材した。そういう方法をとり，なおかついろいろな資料をきちっと読んで整理されているというので非常に高く評価しています。

その講評の中で，例えば10か月ぐらいにわたった取材活動に触れています。ルポは，奇数月，１月，３月，５月，７月，９月に書かれているわけです。ということは，偶数月に動いて奇数月にいろいろ書いていったんだと思います。大した能力だと思います。例えば１月に書いたもの，３月に書いたものは新聞として出てくるわけです。そうすると村民の方からいろいろな反応があったのではないか。そういう反応がどうだったのか。そういう反応を受けて取材の仕方とか，執筆の方向にも影響があったのではないか。それから，ルポが現場に住んでいらっしゃる村民の人たちに影響を

与えたのではないか，そんなことが推測されると書かれています。

そんなことを頭に置きながら，東条さんから取材したときの問題意識といいますか，これは全体にもかかわるのかもしれませんが，この『民が立つ』の取材班との関係もあるかもしれませんが，その辺のことを言っていただければと思います。その後，ご自由に座談会というか，討論していければと思います。

では，東条さん，お願いします。

東条　これが始まったのは，ちょうど郵政解散があったときだったのを記憶しています。2005年の夏ですけれども，そのとき私は社内でちょうど仕事があいている存在で，いわゆる遊軍記者でした。ちょうどその前，中国残留孤児の取材を１年間やっていまして，それがちょうど終わって，次何しようかみたいな話で，あいている記者がいるということで。

長野県は広くて，私は木曽にはほとんど行ったことがなかったのです，同じ長野県の中にいても，木曽地方なんですけれども。私は初任地が飯田で４年間ぐらいいました。その次が長野本社でした。長野本社にいると各地を取材します。その中で木曽地方というのは人口が非常に少なくて，正確には覚えていないんですが中心の町の木曽福島町，今は木曽町ですが，地域の人は福島と言うんですが，当時，8000人ぐらいしかいない。王滝村は約1000人でした。そういうところで新聞の部数も少ないせいか，支局が木曽福島に１か所あって，一人しか記者はいません。新聞も中日新聞が強いところです。名古屋の影響が強くて。

そんな中で今も同じですが，前川英樹という支局長がいますが，彼が木曽地域を一人で回って，日々，地域の問題とか地域の催し物を取材していたんです。その中で，王滝村でどうも大変なことが起きている。けれども取材する余裕がない。一人ではとても回りきれない。日々の取材は当然しなければいけない。本社に何とかするべきだということを言ってきたんです。じゃあ，本社から助っ人を出そうということで，私が行くことになりました。

森氏（左）東条氏（右）

だから連載を書くということは全く想定していなくて，こういう記事をまとめることも考えていなくて，助っ人として本社から行くという位置づけでした。当初は，長野市から高速道路を通じて片道約３時間通っていました。

森　車でですか。

東条　車です。朝10時から村議会があるとすると，７時にうちを出て，取材したら村役場などで記事を書いて帰る。あと常宿を見つけて，民宿ですが，そこに泊まりながら書いたりしていました。郵政解散があって，そのとき，宿のおばちゃんといろいろ議論していたのを覚えています。

そういう生活を続けていましたが，それではいつか事故で死んでしまう。そう会社に申し出て，スピード違反で２回も捕まりまして，お金ももたないということで。（笑）それプラス，本筋で言うと，助っ人で入っていたってどうしようもない。このままでは，埒が明かない。どうしようかという話をして，家を借りたいと申し出たら許可されて，役場から歩いて30秒ぐらいのところにある家を借りました。家賃は１万2000円です。村の教育長にお願いして，教育長が所有している，もう使わなくなった空き家を借りました。

最初は村営住宅はどうだと村長は言ってくれましたが，考えたんですが，村の批判も書くわけです。村営住宅を格安で借りるわけにもいかないだろう。そこは微妙な立ち位置ですが，個人の関係ということで，家を借りて住みました。その時点でも，何をやるかはまだ決まっていなかったんです。夏から冬にかけて，取材していく中でまとまった何かを書きたいというふ

うに。

ここの連載が始まるまでは，単発の連載とか，この前段として，これには出てきませんが，王滝村で今何が起きているかを上下で書いたり，特集記事で書いたりということをしていました。

森　2005年の夏からですか。

東条　2005年の夏から秋にかけて，そういう作業を繰り返して，単発の記事を書いていましたが，これはその場その場で追っていくのではなくて，非常に奥深い話なので掘り下げたいということで，正月からを目指して準備を進めました。想定外のこと，村長が突然辞めるということが年末になって突然起きまして，急きょ第１部を書き換えたのですが，そんな感じで始まりました。

これは，『民が立つ』の中の一つとなっていますが，実は最初はそうではありませんでした。翌年からのキャンペーンを何にするかを考え，住民参加とか，民主主義を根底から考えるという，非常に分かりにくく難解なものをむしろ正面からやるということになって，王滝村も関係するからキャンペーンの一環にしようというので付け加わったわけです。

森　そうですか。やはり違うものね。中身が違う。

東条　掲載面も，社会面で違っています。『民が立つ』の班は４人です。王滝村は一人ですが，あまり議論を戦わせることなく，一人で木曽にこもって夜な夜な悩みながら。相談相手は，主に木曽支局長です。現地の支局長に相談しながら，ときどき本社のデスクに電話をするという生活で書きました。

【村民の方々の反応】

この間，村民の反応があったかどうかですが，当然いろいろありました。住民票を移そうと思ったのは，住民票を移してそこに入っていかないと，なかなか話すことも話してくれない。

森　そういうことがあって住民票を移したんですね。

東条　あと，実務上，家に防災行政無線をつけたくて，それには村民になる必要があって。防災行政無線で，いろいろな情報が入ってきます。今日夕方，何とか会が開かれますとか，寄り合いの案内などが入ってきて，そういうのは便利かなと。地域の寄り合いに出ることから何からやっていかないと本音の部分が聞けないというのもあって，住民票を移したのが年末だったか。

今振り返ってみると，村民が約1000人で，その間にほぼ全員と知り合いになりました。かつ新聞記者が住み込んでいるというのは村の大きな話題になる話で，あいつは何をしているんだと非常に冷たい反応が８割ぐらい。

森　最初はね。

東条　最後まで結構冷たかったですけど。中には優しく迎えてくれる人も，おばちゃんたちもいるという状況でした。基本的には，村のすばらしさを書く記事ではないので……。非常にすばらしいところです。自然が豊かで，非常にいいところなんですね。それに住民の参加意識も都会よりもずっとあるし，みんなで何とかしていこうというのが今振り返ればあるぐらいですが，何で村はだめになってしまったのかというだめな側面をひたすら細かくネチネチと書く。

しかも，これを読んで思うんですが，非常に暗い記事なんです。第１部の最後は，たしか「もう終わりだ」みたいな，（笑）そういう台詞で終わっているんです。なぜこの村はこんなにだめになってしまったのかを，その現場でそのままネチネチと描く。「お前は何をしに来たんだ」という反応がほとんどですね。白い目で見られながら，役場も近いんですが，温かく迎えてくれることなく基本的には過ぎていった。

ただ，書いていくうちに非常に変化がありまして，だんだん口を開いてくれるようになったなというのが非常にあります。特に第１部なんかは，一言でいうと村はだめだということを書いてある話なんで。その次の第２部は林業の「『国』の森」を書いて，その後，第３部でダムのことを書いたあたりから大分村民の感じも変わってきたなという印象をもちました。と

いうのは代弁してくれている，そういう見方で接してくれる。「読んでいるよ」と，必ずしも賛成ではないんだけど，「あのとおりだよね」と言ってくれる人たちが出てきたな，そういう気持ちです。

森　どうもありがとうございます。

【王滝村－危機の原因は何か】

山本　このルポ全体のトーンは，ずっと国，中央に依存してきたという事実と，そこから育まれてしまったというか，助長されてしまったお上への従属意識といいますか，依存していればどうにかなるわいという考え方が村民に植えつけられてしまった。この村が大きな危機を迎えるに至った最も重要な理由はそれである，というのが一番言いたいことなのだろうと思うんですけれども。

たまたまさっき拝見した毎日新聞の記事（「王滝村　借金返済，村民の決意―もう国に甘えない―」『毎日新聞』2008年５月18日付）もサッと読むと，国に依存した一つの象徴が，ダムの建設と書かれています。ダム建設の補償金を使ってのスキー場の建設，これが21世紀に入ってからのといいますか，あるいは20世紀末から木曽・王滝村が困難に至った直接の原因だという趣旨で書かれています。私は，東条君のルポからもそういうトーンを読みとったつもりでいますが，正直言ってそこに一つ疑問があります。

どういう疑問かといいますと，ダムの建設そのものではなくて，そこから来た補償金を使ってスキー場を建設した。そのスキー場自体は，1970年代，80年代は成功していたのではないだろうか。その成功が失敗に転じたのが，1990年代に入ってバブルがはじけてから，マーケティングをきちんとしないままどんどん投資をしてしまったところから，狂い始めたのではないかという感じを何となく持ちます。マーケティングだけではなくて，競争相手も岐阜県側に別のスキー場がどんどん出てきて，そっちにお客を取られることもあったようです。

遠因をたどれば，ダムの建設にあるのかもしれないけれども，90年代前

半期のバブル崩壊と，これにひき続く不況，そのことを十分に認識しないままとんでもない投資をやる。そこが直接の原因なのではないかというのが私の疑問ですが，いかがでしょうか。

森　だめになった原因ですね。

山本　直接の原因が，例えば，毎日新聞もダムの建設にあるんだぐらいの書き方をしていますが，そういうふうに言えるのでしょうかというのが疑問なんです。

金子　後で私が答えてはいけないのかな。

山本　金子さんからも意見を聞いてみたいなとは思いますが。

森　「あのとき」というふうに出てきますね，小林前村長から。「あのとき」というのは，1961年のことなんです。ダムが建設された。それと同時に，補償金２億1000万を使ってスキー場をつくった。山本さんが言ったように，スキー場はずっとうまくいっていたんです。一番多いときは93年で，年間66万人のお客さん。それが2005年になると７万人ぐらいですか。

東条　そうですね。７万人を切り始めて。

山本　我々教員は，みんなでよく２月末にあちこちのスキー場に行って，とんでもないバブルで開発したスキー場にも行ったことがあるんです。

森　あの後つぶれてしまったけれど，北海道のすごいデラックスなホテルの設備，こんなに大きな空間に暖房なんか入れたら大変なお金がかかる。王滝のスキー場では，過剰投資で展望浴場「ざぶん」というのを1994年につくった。

東条　王滝村は，お風呂もつくったんです。

山本　要するに私の疑問は極めて単純で，いろいろな要因が積み重なっているし，その要因というのは，歴史的な積み重なりがあるから，ダム建設までさかのぼっても何らかまわないとは思うけれど，それでも冷静に考えると，この村が深刻な財政危機に陥った直接的な理由というのは，90年代初めのバブル崩壊にあるのではないか。その辺はどうなのだろうか。

東条　書きながら悩んできた部分が，まさにそういう感じです。そのと

きに失敗した村の体質を一番考えたんです。放漫なことをやりながら，しかもそれをチェックできずに，過剰投資を積み重ねてしまった愚かさぶりを取材していて非常に感じました。なぜ，そんな愚かなことを積み重ねたのだろう。後戻りするチャンスはいくらでもあったのに，それを後戻りできず，村民も気づくことなく過ぎていってしまった。議会もチェックできない。そういう愚かぶりを非常に感じまして，それが直接の原因です，村民の愚かさぶりというのが。いかに愚かだったかを書いた記事だともいえます。

だけど，それだけでは不足だというのを常々感じていて，愚かさぶりを克明に描いた一方で，それを包み込む問題意識は何だろうという視点で考えると，その村は日本全体の中でどういう立ち位置で過ごしてきて，そうせざるを得なかったのかを位置づけると，ダムや林業まで結局行き着くのではないかという枠組みでとらえ直しました。

山本　今の話で一応僕は僕なりに納得しました。

【危機の背景の根は深い】

金子　でも，もう少し背景が深いように思うんです。というのは，山本さんのような地理学を除けば，エネルギー転換と治水と食料の自給という経済学では最も扱いにくい問題が背後にあるからです。それは，非常に長期にわたる政策で，リスクもコストも計算しにくい世界です。今，全国で財政的に危ないワースト自治体のうち，夕張市と歌志内市とこの王滝という実質公債費比率が最も高いところは，すべてエネルギーが絡んでいるんです。

夕張，歌志内は炭鉱で，王滝はダムです。同じような問題は，もっと原型的にいうと福島の奥只見みたいなところですが，あそこも水力発電で一気に潤うんです。明治時代ぐらいから一番最初に電力でいくんですが，エネルギー転換の中で，あるいは施設が老朽化していくにつれて廃墟になっていくんです。

我々が今直面しているのは，地震による原発問題です。福島の第一原発が今止まって，双葉町というところが同じく，普通，原発の町ではあり得ない町の財政が赤字に転落するということが起きている。柏崎刈羽も動かない状況になりますと，電源とくに発電所の場合は，電源交付金が莫大に入ります。なぜかというと，都会の真ん中で火力発電所も原子力発電所も設けたくない。そうすると，当然，国は過疎地を狙います。過疎地は，よだれを垂らしているわけです。人口はどんどん流出するし。一気にドーッとお金が来るんです。ところが，大体20年ぐらいで電源交付金が減っていってしまうんです。そうすると，そのお金を使って，何か次を打たなければいけないとなっていくわけです。夕張は，炭鉱の閉鎖が契機になって，結局，さまざまな産炭地の振興金を使って観光事業に乗り出す。

実は王滝もおとなしくやっていればよかったというのも，ちょっとかわいそうな面があります。過疎化していくとき，電源とか用水とか治水で大量のお金をバーンともらったとき，次，何とかこの人口を維持していこうと思うと，次の事業をやろうとするんです。山本さんがおっしゃったようにマーケティングもしないし，将来も考えていない，そのとおりなんですが，経営能力がないというのはそのとおりなんだけど国が煽るんだ。

80年代はリゾート法ができたし，夕張も第三セクターを次々につくった。この王滝も，公営企業化していくわけです。本体の財政から切り離して，一時的に入ったお金を次々とそこにぶち込んで借金を重ねて，これしか村や町が生き残れないみたいな状態に追い込んでいくわけです。

同時にたくさんの学者は，民活で民間セクターを入れて，これからはみんなゆとりのある生活の時代だとか，バブルに酔っぱらうような言説をどんどん流して，リゾート法をどんどん推進してということをやってきたわけです。その口車に乗ってしまったというのが「お上」なんだけど，その後は今見捨てて財政健全化法で，昔煽ったことはもう全然忘れてしまって首を締めていくんです。

奥只見の，すごく過疎化で，僕も行ったことがありますが，おじいちゃ

ん，おばあちゃんしかいなくなって，打つ手もない状況でどんどん衰退していくようなところで，かろうじて農業でいろいろやっている。30代半ばの青年が入って，自給野菜を集めて産直するなど，いろいろな新しい試みが出ているんですが。

福島の原発はいずれ，原発の寿命は40年が限度だと思います，アメリカでも。そうするとどうもならない，長い間稼働しない原発の施設が，そこにずっと残ることになるわけです。それは，奥只見のダムと同じで，過疎であるがゆえに，都市が消費するエネルギー供給源となる。どこも引き受けないので大量の金が下りてくる。一回それに手を染めてしまったときに，次のお金，そのお金をつないでどうやったら村の人口を維持して，職を維持して生きていけるのだろうか。絶えずそこに追い立てられて，国が政策を煽れば，それにどんどん乗っかっていく，そういうことになってしまっている。

多分，これをやめて何かうまくいくかというと，いずれ都市民に跳ね返ってくるわけです。今，CO_2排出で石炭の火力がすごく大きいし，原子力が止まった状態だし，中山間地が荒れて，全国各地洪水だらけになっているでしょう。鹿児島，宮崎，福井，高知，どこへ行っても治山治水が壊れているんです。それはまさに国有林と同じで，林業をみんな手放している。山が維持されていることを前提に公共事業で河岸を固めてしまって，山が維持できなくなって，しかも温暖化で集中豪雨みたいなのが降るようになった途端に，川下の中核都市にどんどん被害を与えるという悲惨なことが起きている。

長野県は，全体としていうと休耕地，耕作放棄地がワースト３ですし，県の財政赤字も実質ワースト３なんです。実質公債費比率を，県レベルで見ると。だから，そういう山だらけのところで衰退していく中で公共事業しか生きていく術がない，諏訪地方などいくつかの工業集積地を別にすると。そういう流れに，どうやって抗して生きていけるモデルを構築しなければいけないのか。お上のシステムに乗らずにというのはすごい難問で，

東条さんの書いたものを読みながら，それが最後まで見えないということでむしろ絶望的な感じがしてしまいました。問題は，そこなんです。

お二人はドイツだから，東ドイツのQ-Cellsという太陽光の電池メーカーが今，世界でトップにのし上がったでしょう。あそこも，もとは産炭地でしょう。夕張と似たようなものですね。

山本　Q-Cellsって何。

金子　Q-Cellsは太陽光電池メーカーで，ドイツの環境政策で，今シャープを抜いて世界１位になってしまったんです。そこは，旧東ドイツの産炭地なんです。ボロボロの産炭地。

ちょっと話が飛びますが，ヨーロッパは国境を接しているから，地域を見捨てないというか，山の中にも大量の補償金を出すというのが多分あるのではないかなと，どこかで私は思っているんです。学問的ではないけれども。竹島に住んでいないと隣の国に取られてしまうみたいな感覚って，国土保全の感覚が日本とはちょっと違っているのかな。地域で産業を分散して，国土全体で発展しようという発想が非常に強いのは，国境が人為的に区切られていて，その中で国民国家が近代できてくるわけです。そうすると，農業や地域の産業という政策に対して，逆にいえば都市に対する計画に対してもきちっとした発想があるけれども，この国はそういうものがないまま，アメリカ方式の無秩序な経済学モデルみたいなものがドーンと入ってきて，コミュニティそのものが崩れているだけ，そういう中でエネルギーとか治水，食料という非常に長期でしか利益が見えてこない問題を高度成長期以降，全部切り捨ててきてしまった。長野県王滝村は，夕張と同じようにそういう問題の象徴なんです，今非常に苦しくなっているのは。

東条さんは，中に入ったから，なんでこんな罠にはまってしまったんだろうという思いが非常に強くなったんだろうと思うけれど，僕もよく地域を回りますが，入りすぎないがゆえに，ここもそうなんだみたいな，突き放した見方になっているのかもしれませんが。

森　分かり過ぎてしまったというところがあるんだね，内実。

金子　僕らは突き放して，研究者みたいなポジションなので余計そうなのかもしれないけれども。結局，ツケはすごく長い期間にわたって都市民に回ってくるんだろう。でも，この関係は経済学的には計算不可能な問題なんです。だから，混乱してだめになってというふうになってみないと都市民は分からない。東条さんが何でだろうと思うのとは違って，そうならないと分からないのだろうなという方に僕は絶望感を感じるんです，逆に。

森　山本さんはバブル崩壊で，そうした経済情勢と競争が激化したとか，そういう状況をきちっと判断できなかったところに問題があるのではないかというご発言だったと思います。それに対して東条さんは，そういうことを見抜くことができない愚かぶりといいますか，こうすればいいのにこういうふうにしない，なぜだろうということをおっしゃっていました。

大きな風呂なんかつくらないほうがいい，過剰投資だという意見もあったはずなのに，そういうのに乗らない。それはやったけれど，あとは結果論だという言い方をしているわけです。そうなってしまった遠因は，この村長さんは1961年のダムの建設とそのお金でスキー場に走った。スキー場がうまくいったんですね，時流に乗って。65年，70年，80年，赤字になるのは90年代の終わりでしょう。

金子　どこもそうですよ。観光事業に手を出して，リゾート法で三セクをつくってドボッと入ったところは，本体の財政以外のところで土地開発公社とか，高齢化で病院，国保，老人保健事業が一方で赤字になったりして，何もしなかったところはそれで持ち堪えるので必死なんだ。長野なんかは，そういうところがたくさんあります。栄村から始まって。

山本　栄村もたいへんなの？

金子　老人ばかりで，老人が老人を介護して，ヘルパーの資格を取らせている。あと，田中知事が住民票を移したところ，泰阜村，あそこも福祉で必死に支えるという，何とか高齢化赤字を支えるということでしのごうとする。そういうパターンか，プラスアルファで突っ込んでしまったところ，何とか反転して若い人の雇用をつくろうとか，産業をつくろうとやっ

てリゾート法に乗ったり三セクでやったり，工業団地をつくったりというところが，今，財政再建団体。国が80年代後半に煽ったところが，みんな財政再建団体になっている。

森　夕張なんかは極端だものね。

金子　あそこは特殊だけどね。あそこも中田鉄治という市長さんの個性が強烈でしたから。

森　市長さんがやりすぎたところがあると思うんです。

金子　結局，国の方もみんな知っていて補助金をずっと出し続けていた。最後，つぶれているのが分かっているのに出し続けたからね。経産省なんかそうだもの。

森　そこに行くまで放っておいたというのは，さっき国が煽っているという話が出たけれど，やっぱり国の政策ですよ。そういうふうになることが分かっていて，国はもっと早く手を打たなければいけないはずなんです。それをやらないで，ここへ来て三位一体ということでばんばん補助金を切るし，地方交付税も落としていく。そういう構図で国全体が赤字になっているものを，僕なんか見ると，地方に肩代わりをさせていくような事柄が，今の状況ではないかと思います。

【優れた村長，優れた市長―国の責任だけにはできない部分】

金子　そういう面と同時に，ひどくなったところは優れた村長，優れた市長と言われる強烈なキャラクターがいるんです。それで，一時期，事業を引っ張っていくの。一時期うまくいくんですよ。毛沢東とかああいうのもそうなんだけど，（笑）うまくいった後，長続きしてしまうと，状況が変わってその人のやり方が通用しなくなっても，誰も文句を言えない状況ができてしまうんです。

官に乗っかってしまったという面だけを強調しすぎると，ここまでひどくなったのは何だろうと考えると，東条さんが言うように，ここも強い村長さんがいて，事業を引っ張ってきたわけです。みんなはそれで一時的に

潤うわけです。やり手なわけです。夕張の中田鉄治もそうです。そういうパターンというのは，失敗が始まってもその村長はやめられないんだ，人間というのは。行き着くところまでやり続けなければいけなくなってしまう。バブル崩壊でだめになっているんだけど，傷を深くしてどうにもならなくなって，再建団体寸前というところまで行ってしまうというのが概ね見えてくる。

だから，そこで「民が立つ」と言うんだけど，閉鎖的な日本の農山村は，東北なんかもそうなんだけど首長次第なんです。本当にどうにもならなくなってから交代する。もう一つは，2 派あって公共事業の奪い合いをして，血みどろの闘いをしているところ。これも自分の利害は降ってこないので，そいつらを落っことして，今度は自分がやるから泥沼にはまっていくんです。この二つのパターンがあって，国の責任だけにはできない部分というのがあるんです。お上対民の真ん中で，日本の基礎自治体における高齢化が進めば進むほど，やり手の人が出てしまうと逆に動きがとれなくなる一つのパターンなのだろうなと思います。

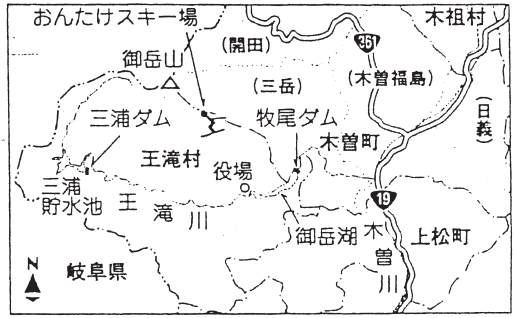
【王滝村の村長さんと時代の流れ】

森　質問なんですが，いま村長さんの話が出たんですが，王滝村の村長だけど，最初，細尾という人がいますね。

東条　はい，戦後間もないころの。

森　1932年に村長に着任して，戦争があって，それから帰ってきて54年に再任して，61年にダムを受け入れた。かなりのやり手ですよね。「これはもうどうしようもない。これは受けるしかない。吉田茂が裏にいて，国が全面的に出てきてやったんだから，それならばできる限りの補償金を取るんだ」ということで，窓口は村に一本化するし，切り崩しはさせない，家，土地，囲炉裏，竈，針 1 本まで全部補償させて，当時としては信じられないぐらいのお金をかち取ったといいますか，そういう名村長，私はそう見たんです。

王滝村



（出所）「信濃毎日新聞」2006年１月15日付。

その後に家高という人が野沢温泉村から，スキーのできる人で，この方が村長になるんです。その人が村長になるのは1975年です。スキーがうまくいっている段階なんです。そして，スキーが赤字になったころに，もちろんその間に15億円ぐらいお金をためておいてたので立派だと思うんですが，99年にやめるんですね。赤字が１億円出た段階で。

その後，小林さんという人が，58年から職員になって，ずっとたたき上げですよね，王滝村では下からずっと。その人が村長になって，この人は本当に苦労に苦労して民営化を考え，つぶされて，もう一度民営化を考える。そして村長を辞めざるを得ないという。そのときに企業債を過疎債にしてほしい。そうすれば何とか生き残れるのではないか，政府に交渉に来たりした。

金子　一番交付税の裏負担が出るんです。過疎債，辺地債は。

森　そういうことをやって，細尾村長と家高村長の間にもう一人村長はいなかったんですか。出てこないけれど。

東条　出てきますが，存在感が薄いですね。

森　知りたいなと思って。細尾村長は戦時中，満州視察に行って「満州日誌」を書いている。

山本　長野県は満州に行った人が多い県ですよね。

森　全国でも一番多くて，満州に行った視察の様子を細尾村長は書いていて，事実は書くけれども，どうなんですか，「読むと行ったら大変」というように読めるものなんですか，あるいは彼は行ったら大変だということを説明した，要するに王滝村からは誰も出さなかった。

東条　あれは行くもんじゃないというふうに村民に説明する資料ですね。自分が見てきて。

まさに泰阜村がこぞって行って悲惨な目に遭った村ですね。

今のリーダーの話を王滝村に当てはめると，私もだんだん思い出してきたんですが，細尾さんというのが戦後に，それまた大村長がいて，それを象徴するエピソードとしては満州に行くなということまで言えた人なんです。さらにそれを受け継いだのが家高さんです。その間に誰かいたかもしれませんが，事実上，細尾村長の指名というか，跡継ぎ的に若手の中にいいやつがいるということで上がってきたのが家高村長です。独特の名字ですが。その家高村長は今もご健在で，話もしてくれる人なんですが，その人がダム以降，ある意味，官の枠組みで推し進めてきて大村長と言われ，長野県の中では一目置かれる首長でした。木曽郡の中では王滝だけは一味違うぞという，山から見下ろすような感じで，逆に周りの郡から王滝村はすごいと見上げられるような村を築き上げた大村長が続いたわけです。

その次，今回の本の主人公ともいえる小林村長は家高さんから引き継いで，これまた無投票だったかな。いずれにしろ事実上の無投票みたいな形で受け継ぐのですが，小林さんはそれまでの二人の大村長とは違うタイプの人でした。たたき上げできたんですが，強いリーダーシップで引っ張るタイプではありませんでした。取材の一番の協力者で，非常に感謝しています。自分の失敗も含めて語っていただきました。

この人は，理解はしていたんです。その大村長の路線では，村はやっていけない。理解はしていたけれども，方向転換は難しかった。今までの流れを，スキー場が斜陽になってくる中で，このままではだめだと日々思い悩み，苦労しながらも村民を説得することはできなかったし，議員を説得

することもできずに，それまでの流れをそのままやっていってしまって，身動きがとれないところまで行ってしまいました。

山本　それは，その個人の弱さという問題なのか，それともさっき金子さんが言っていたような，言ってみれば周りが，周りというのは国，場合によれば県，こういったところが，こうやったほうがいいですよといろいろお膳立てしてくれるものだから，それに乗っかってしまったという弱さなのか，はたまたもっと別の何かなのか。

東条　リーダーのいろいろな意味の弱さというのがこの取材の肝だったのですが，金子先生がおっしゃったように，でき上がった流れというのはそう簡単に変えることはできない。村民も，そう思ってしまっているんです。スキー場は自分たちの要求にこたえてくれるのは当然だと思っている村民たちがいる。例えば，村民がスキー場を使うときは安くしろという要求をしてくるわけです。村民のためにスキー場があるのだから，多少赤字でもやるべきではないかということを要求してくる村民がいる中で，それを覆して効率的な経営をすることは難しい。職員を雇用していて，明らかに人が多くても削ることはできない。公共事業でやっているのだから，維持するのは当然だという意識の中で転換することができない。それを分かっていながら，転換することができない弱さもある。

一方で，発想の転換というのはなかなかできなくて，過疎債をお願いしに行くというシーンにもあったのですが，小林村長は既存の枠組みの中でどういったことを利用したら生き残れるかを一生懸命に考えました。前副知事の阿部さんという，今，横浜の副市長をやっているのかな。その阿部さんのもとを頼って総務省に過疎債になんとか置き換えられないか要求したりとか，あらゆる手を使って村が生き残る道を考えていたんですが，結局それは無理でした。最後，諦めて放り出してやめてしまうというところまで追い詰められました。

【つまずいたスキー場民営化】

森　村民が出資して，公営企業というものをつくったわけでしょう。第三セクターでしたか。

東条　三セクという会社は別にあって，スキー場はまさに村営なんです。

森　村営なんですね。そこと小林村長がうまくいかなくなっていくわけですね。村長は，民営化をどんどん進めていこうとしたけれども，それができない。

東条　そうですね。

森　そういう話が出てきますね。だから，やはり……。

東条　スキー場に関連する三セクがあって，村の観光部分を担うんですが，それは村の重鎮たちが実権を握っていて，そこに逆らうことは当然できないという図式がありました。

森　そこを抜いた民営化をやろうと思っていたんですね。そうすればできると思ったんだけど，それを抜くならやらせないという動きが。

山本　その記事ね，それも外部のコンサルの言うがままでしょう。というふうに僕は読んだんです。要するに，村の観光会社ではまともなことができないから，それを外しなさいというコンサルの言うままに動く。自分で考えていない村長だったのかもしれない。と言ってはいけないかもしれないけれども。

森　読み方が大分違う。

東条　厳しい見方ですね。

金子　観光事業なら，民営化すればいいじゃない。コンサルの方も大したことを言っていないんだろうけれど。

東条　でもコンサルのやっていることが実現したら，どうなったか分からないですが。

山本　もちろん，どうなったかは分からないけれど。

金子　加森観光はどうなったのかしら。

東条　加森観光が経営する王滝村のスキー場は今年は厳しいようです。

事故があったもので。ゴンドラ事故が，人は死ななかったですが，11時間閉じ込められる事故が。

金子　加森も大変なんだ。

森　北九州のスペースワールドも加森だ。

金子氏（左）山本氏（右）

東条　夕張の観光施設も加森観光の経営です。どうなのかという評価は，まだできないですね。

金子　これから分からないね。

【赤かぶに，希望の光りを見出したい】

山本　複合的な要因があるので国が悪いからだとか，村長の弱さということだけではなかなか言い切れないと思うんだけれども。それもみんな一つひとつの要因で，それらが複合的に組み合わさっているんだけれども。

さっき金子さんが，このひどい状況になった村が将来，展望が開けるようなものが読んでも見えないと言ったんだけれど，でも東条君が書いたこのルポを最後まで読むと，赤かぶに希望の光を見出したいという気持ち，それはよく分かるんだけれども。

金子　それで，村全体が食っていけるのだろうか。

山本　そうそう，思わず。（笑）それで本当に大丈夫なのでしょうか，ということも聞かせていただけますか。

東条　展望が見えない，絶望的だというのは僕も同じ気持ちで，連載を終わる時点で正直，絶望的な気持ちのまま連載を終えたんです。それだけでは悲しいから，最後，付け加えという形で赤かぶに象徴させたんですが，結局，自分で考えていくしかないですよという，ある意味突き放した考え

方なんですけれども。そういうことも含めて『民が立つ』という流れで，そう簡単に『民は立てない』という結論になってしまうんですが。

山本　確かに簡単ではないとは思うけれど。

金子　似ている事例はたくさんあります。『地域切り捨て』という本を書くために行ったんですが，福島第一原発がある双葉町でもひどい財政状況です。電源交付金に依存したばらまきを直すために新市長が立って，本人もびっくりで当選してしまった。自分の給料を半分にして，粉骨砕身で頑張っている町長がいるんですが，産業振興で考えているのがホウレンソウなんです，赤かぶでなくて。だけど，それで所得を得るには相当の団地にならなければいけないし……。

夕張だって，夕張メロンはあるんです。あれもＦ１で，網かけのマスクメロンと北海道元来のウリがあって，それのかけ合わせでつくるものですから，種が独占できるので，夕張は30代，40代の農家で2000万円ぐらいの年収になるような農家はざらにいるんです。連作障害の問題とかいろいろありますが。でも，夕張全体はそれで食っていけないものね。

森　それだけではね。

山本　農民のパーセンテージは圧倒的に低いだろうし。

金子　自分の印象だと，地方中核都市で２～30万人の規模になってしまうと何とかなるんです。商業が集積するし，サービスもあるし，公共的な機関もあるし，だから結局周辺から人が集まってくるんです。人口が少なくなった中山間地は，生きるか死ぬかの状況だから，『食から立て直す旅』でも紹介しましたが，いい事例も死に物狂いの中山間地でしかないんです。中途半端な農業地域はだめなんです，努力しないから衰弱していくんです。一方，中山間地でだめなところは限界集落みたいになってしまいます。

意外に苦しいのが，５万～10万ぐらいの都市なんです。結局，こういうところは農業だけでは食っていけなくて，何かの会社とか産業がないと食べられない。

東条　上伊那もそうですね。

金子　上伊那もそうだし，上伊那は，それでも兼業が成り立つような農家で，まだまだいいんです，諏訪とか。

東条　そうですね。

金子　例えば，須坂にもよく行きますが，須坂は戦前は織物があって，その後来た富士通の工場が逃げてしまうと，まちの衰退は急激に進むわけです。そうすると，農業だけでは食っていけない。産業が何か１個抜けてしまうと，次々に病院は閉鎖する，診療科はなくなるみたいなことが続いてしまうので，なかなか歯止めが利かなくなります。夕張も，もともと10万を超えていたエネルギーの単一産業（石炭産業）だったので，それがだめになった瞬間に１万前後になるわけでしょう。この中にも出てくるけれど，若くて移れる者から動いていってしまう。移れない人だけが残っていくようになる。

山本　それは，どこでもそう。

金子　そうなってしまうと，つまりそこまで来てしまうと，よっぽど馬力のある人が来て，すごい面白いビジネスモデルを考えて，農業で大展開をするという話にならないと，大逆転はないんですね。農業でいろいろやっている面白いところはたくさん知っていますが，なかなか難しいと思います。

東条　結局，人の話になってしまいますね。有名な上勝町の葉っぱの話とか，そういう話題を王滝村民とよくするわけなんです。だから，何かがないとだめだと思う。

金子　あれ，NHK教育テレビ全国で放送したのは僕なんです。

東条　最初に？　葉っぱビジネスで。

山本　四国のあの村でね。

金子　それまではＩＴを使うおばあちゃんとして紹介されていたけれど，違うんじゃないのって，何年前だったかな。

東条　あれも，その背後にはすごい努力があるわけです。ああいうのに憧れる気持ちでいるわけなんです，王滝村民は。

金子　あれは，横石さんという「彩」という会社を立ち上げた人です。彼は農業技術普及員で雇われて悪戦苦闘して。もともと徳島市内の人で，県立の農業大学を出た都市の人なんです。どこかで閉鎖的なものを破っていくような人が，外から入ってきて悪戦苦闘して閉鎖性を打ち破って，ある種のマーケティングができたり，ある種の事業が組織できるような人が入っていくとたちまち変わっていくんです。

だけど，それはかつてのやり手の村長さんがいたのと同じなんです。今，そういう人が来ないと立て直せない。その人の跡継ぎになるような人が降って湧いてくるように育つかというと，小さな村の単位，町の単位というのはそういう人次第になってしまうんです。

森　赤かぶの話を聞きたいんですが，突然亡くなった県の職員が働きかけて始めた事業なんでしょう。

東条　そうですね。

森　それはある程度普及し，そのことで村が立ち直れるほどではないとしても，その事業自体は一応成功しているんですか。

東条　いや，成功失敗を判断するレベルまで進んでいないです。そこまでのボリュームもまだない状態だなと。逆に言えば，そういうものが何もなかったという。

森　御岳に観光に来た人には，販売できる程度につくって売っているという程度ですか。

東条　はい，店に置いて。

森　その程度なんですね。

東条　それと同じようなもので，「すんき」という乳酸発酵の漬物があったりとか，同じ観光でも，今までとは違った枠組みでできないか。それも加森観光など，外部の助けを借りながらですが，少しずつ動き出しています。わずかな光を見出してはいるという状況なんです。でも，基本は展望は見えないままなんです。

【展望を見出す発想の転換が求められている】

東条　展望というと，『毎日新聞』の記事にもありましたが，産廃施設を，例えばどこかから何か持ってきて楽にできないかという発想も多いですね。議論でよくあるのは，産廃施設を持ってくればできるのではないかとか，自衛隊の練習場にしてもらおうとか，刑務所を持ってくればいいのではないかとか。

森　その発想は，すべてダムの建設から得た補償から来ている。

金子　産廃，原発，基地。

森　とにかく迷惑施設，いわゆる迷惑施設ですね。

金子　その三点セットですね。それでは六ヶ所村みたいに豊かになれません。町，村は本当に荒廃しますよ。村長は自殺してしまいました。

東条　そういう，何か持ってこれないだろうかという発想はありますね。これは３年前，２年前なので，その後離れているので，また新しい動きが出ているかもしれないですが。財政的にも，とりあえず我慢すれば，ひたすら我慢して耐え忍べば，財政再建団体にならずに回避して，もちろん基金も全部取り崩してやっているんですが。

森　人件費だって，給料の25％カットですか。

金子　夕張なんて市役所の職員の数も，十何年後の計画目標以上に達成してしまっているんだもの。みんな辞めてしまう。こんなんではローンも返せないと。

東条　村民も，ひたすら耐え忍ばなければならないという意識だけは，とりあえずマスコミを通じてみんな認識はした状態だと思います。

山本　現実，ここの村の人は人口がまだ約1000人で，ということは働いている人は600人か700人ぐらいいるのかな。その人たちのほとんどの職業は何なの。

東条　職業は，第三次産業の旅館とかが多いですね。観光産業が。

山本　兼業農家ですか。

東条　農家は，あまりいないんです。昔からの三次産業の村で，御嶽山

に来る人たちに，御岳信仰の信者向けのものを売ったり，泊めたり，それが産業ですね。

農業は，自給自足的です。レタスで有名な川上村とは全然違って，ああいう農業で打って出るタイプではない。そういうのは，ない村なんです。地形的に山ばかりなんです。

山本　さっき金子さんが，人口30万ぐらいあれば何とかなるかもしれないとか，何とかなるように言っていたけれど，僕は最近は人口30万でも危ないなとは思うんだけど，王滝村から通える範囲に30万とは言わないけれど，そこそこの都市があるかといったら，まず絶望的なのね。

東条　全くないですね。例えば，飯田市が人口10万人ですが，有名な下條村という村，村長が有名になりましたが，子どもが増えている奇跡の村だというのでマスコミに紹介されて。それを見ていても，人口10万人のまちがあればまだ何とか立て直せるんですが，王滝は難しいですね。

山本　飯田は，産業があるから。

東条　車で40分走って，木曽福島にしか着かない。その中心地が8000人しかいないですから。一番近いのは，岐阜の中津川か松本に出るしかない。とすると，片道２時間ですね。通うのは無理です。

【条件の似た村から得られるヒントはないか】

森　第２部「「国」の森」のところで，似たような村の話しが出てくるでしょう。高知県の馬路村，ほとんどが森林で国有林で，だけどここでは柚子の木を植えて，20年ぐらいかかって，柚子の加工品をつくって，それを物産展に出し，都会でも宣伝し，通信販売をしている。木工でも，中身は分からないけど，木工の加工場をつくっている。要するに，山にある，自分のところにある素材を使って産業を起こしている話が出てくるんです。そうすると，王滝村の場合には，村有地が結構あるでしょう。土砂を埋めるために村有地を売ってお金を稼いだ。そんなのではなくて，何か将来を展望するようなものを，馬路村のようなものを考え出してやるという

発想は出てこないんですかね，王滝村では。

東条　今の日本の枠組みでは，少しずつでもそれをやるしかないと思うんですが，今のところは少ないですね。ごくわずかな赤かぶの話とか，観光のちょっと違った健康をメインにした観光にしようとか。

森　配布資料の一番最後にある王滝村のホームページを見たら出ていたんだけど，いわゆる山村留学は始めているんですね。

東条　山村留学は，私も親しいんですが，この連載には偶然登場しなかったのかな。

森　連載には出てこないですね。

東条　前の記事ではよく取り上げたんですが，自主的にやっているんです。財政難の中で，村の補助は切り捨てて，切り捨てたけれど都会から来た人が独自に今も続けているという。

森　かなり自主的にですか。

東条　お金は村から一銭も入らないで，すべて保護者からのお金とか賛助金で山村留学を経営しているというのがあります。それは結構希望があるのではないか。もちろん厳しいですけど。指導員の給料なんかは。

森　『民が立つ』の第１章では，小谷・中谷郷で山村留学から村が手を引いたらお金が集まらない。自主的にやろうとしたら2000万円ぐらいかかる。いくら集めても600万円。その寄付を約束した会社がつぶれてしまったから，結局断念したという話しが出てきたけれど，ここはうまくいっているわけですね。

東条　うまくというか，苦しみながら何とか維持できている。名古屋から結構子どもたちに来てもらって。

【よその地域とのつながり―資源が大切】

山本　そういう話を聞くと群馬県の川場村のことを思い出してしまうんだけど。大学の授業みたいな話をすれば，市町村スケールの地域が，ある種の経済的な豊かさを得ようとするのであれば，その地域の中にこもって

いたら無理ということは絶対確かであって，要するに，よその地域と何らかのつながりを持つしかない。そのよその地域というのは，その村あるいは町を取り囲む世界全体と考えていいんだけど，そのつながりというのは，結局はよその世界に売るべき何かを自分たちで生産するか，あるいはよその世界から自分たちのところにやってきてくれるか，どっちかしかない。経済的には，それが当然です。

そのときに山村留学的なものでつながることもあるだろうけれども，川場村のことを思い出すと，あそこはあそこでかなりそのための努力をしてきている。例えば，リンゴ農家がかなり増えた。たしかあそこは戦後，引揚者が入ってきて，それがリンゴをつくったんだと思うけれども，そのリンゴの品種改良もし，そのリンゴの木の所有者に世田谷区の人になってもらって，毎年やって来てもらうという仕掛けをつくったり。もちろん世田谷区の林間学校で，世田谷区の小学生は全員あそこに必ず行くというような仕掛けをつくったりして，それでつながるという側面があると思う。

聞いていると，木曽の王滝村の住民のほとんどが商業で，あるいはサービス産業で生きてきたということになると，自分たちの村の中にある資源とは一体何なのかとなると，昔は御嶽山，ある時期まではスキー場，これしかない。それ以外は全く考えられないという状況にあるのではないか。そこにある資源を何かうまく使うということはないのか。

金子　温泉はどうなの。いいの。

東条　温泉はあるんですけれど。

山本　1000メートル掘れば出てくる温泉かな。

東条　今もあるんです。ただ，まさに財政難で閉鎖して，その後，住民が自主的に始めたというところまでは知っています。

金子　沸かさなければならない。

東条　いや，そのままで大丈夫だと思うんです。だけど，ものすごい奥地なんです。交通の便が圧倒的に悪い。逆に人を，だからやり方によっては今どきいいと思うんです。林道を走って行って，こぢんまりとした，ち

ょこんとしたのがあるんです。宿泊施設も何もなく，ただお湯しかないですけど，いい雰囲気なんです。

金子　阿智村みたいに，昼神温泉みたいなものがパーンとあれば，そこそこ成り立ってしまうじゃないですか。それよりもずっと奥で。

東条　あまりに奥ですね。

山本　到達するのが大変だ。

金子　阿智村に何度か行ったとき，高速バスで４時間というのは，エコノミー症候群になりそうで地獄だなとは思ったけど，それ以上となると結構つらいものがあるよね。

東条　つらいですね。

金子　愛知から呼ぶほうがいいのか。

東条　だけども王滝村は遠い。

金子　愛知からもアクセスは難しい？

東条　国道19号で，途中，中央道と19号をつないでいくといいんですけど。でも，その手前にもっといいところがあるだろうとなってしまうんですね，ライバルが。よっぽど何か，売りを見つけていかないと。でも，温泉のお湯はいいんです。私も入ったりして，土日しか今はやっていないのかな，あれですけど。だけど，何かこう……。長野県内でも，妙なところに人は行くんです。

山本　白骨温泉にも行くし。（笑）

東条　そういう例が伊那のほうでもあるんです。

森　トンネルみたいな道路を通っていくの，おっかなかったよ。

東条　白骨ですか。

東条勝洋氏

森　ええ。すごいところだった。トンネルの中で道路が二手に分かれるんだもの。

金子　都会から離れようとしたら，そういうところに行くんだけど，それほど豊かな人がいるかというといない。また暇な人がそんなにいるわけではないから。

山本　それだけではやっぱり，村人がみんな食っていけるほどお金が入ってくるわけではない。

金子　やっぱり苦しいよね。

【地元の資源を生かして事業展開できないか】

東条　資源ですね，山とスキー場しかないですけど，ほかの資源を自主的に見つけ出そうとしているのは確かです。今までは，そういうのが逆になかったから，今回のこの連載の関連で言えばいろいろな騒ぎ，一つの乱を経て何か気づいた人は非常に多くて，何か資源を見つけていかなければならないなという人たちがたくさん出てきている。

それは例えば，山村留学もそうだし，あと修学旅行を呼び込もうという動きも最近は出てきています。上田のほうに，修学旅行の受け入れで有名なところがあるんですけれど，旧和田村という地域ですが，その地域は修学旅行を受け入れて農業体験とかする。非常に忙しい。そこに視察に行ってノウハウを学んだりして，王滝でもぜひ始めたいという動きもこの連載の後ですが出始めています。そういう交流をして，何らかのものを生み出していこうと。

山本　結局は，さっき言ったことの繰り返しになるけれど，資源というのは，必ずしも天然資源だけを考える必要はなく，それ以外にもいろいろな資源があり得るとは思うけれども，村の中にある資源をうまく使って，それと村の外の世界に広がるどこかとうまくつながるというか，その道を考えるしかないのだろうなと思います。

だけど，具体的に何がいいのかは，一番分かるのは村人自身なんだろう。

よそのコンサルが言って，何か気がつくことがあるけれども，コンサルからヒントをもらってもいいけれど，自分たちで考えるしかないのでしょうとは思うし。

金子　自分たちには，そこにあるものは当たり前だから，気がつかないということもあるから，やっぱり外の血が入らないとだめなんですよ。自分の経験では，うまくいったところはみんなそうですね。

コンサルタントみたいなものも，いわゆる定型的なことをやっている，大量に引き受けているようなところはもうだめですよね。地方の場合には，地方で一生懸命やって，面白いコンサルタントはいることはいるんです。

山本　信州のために，信州の中で生きている，信州の村々を何とかしようというシンクタンクはないの。

森　前のほうの『民が立つ』に「参加」という章があって，その第4部で「まちをつくる―善光寺門前で」という話が出てくる。これなんか読むと，金子さんが言ったとおりだね。特殊な能力がある人がそこに入ってきて，「食品館」を出し，それから善光寺門前に複合商業施設をオープンした話が出てきたんですよ。今の王滝村の秘境の温泉も，何か工夫すれば人が集まってくる可能性があるのではないかという気はする。

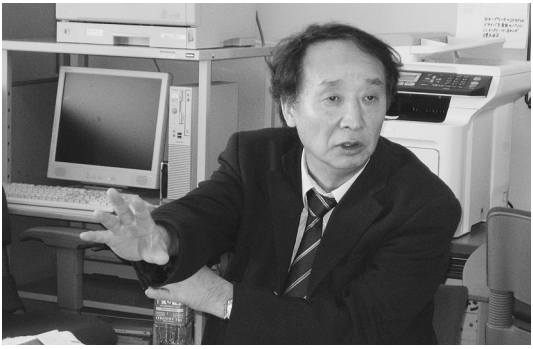
金子　そうは思いますよ。電通，博報堂に頼まないことだよね。（笑）同じフォーマットに村の名前を入れて，あとみんな同じみたいな。外からニーズを持ってきても，地元密着型でちゃんとやっている人はいることはいる。だって，南アルプスの水とかいって，『当世・商売往来』で別役実が究極の商売だと言っているけど，ただ同然じゃない。

山本　南アルプスの水が？

金子　そうそう。これで商売できるわけだから。だから，何が希少かは都市民にとっての価値であって，そこの村では何の希少性もないのだけど，別のところへ行けば希少なものだということはたくさんあるんです。

山本　そうね。

金子　「打って出るような」とさっき山本さんが言ったけど，僕がレポー



金子　勝氏

トした中で一番すごいのは大分の大山町，日田市の。

山本　有名なとこだね。

金子　それも，僕がNHK教育テレビでやった所なんだけど。六つか七つの直売所を展開していて，もう地産地消を超えてしまっている。農協が堆肥工場を作り，キノコの栽培のおが屑に微生物や酵素を入れて堆肥をつくってみたいなことをやって，それでできた産物を直売で売る。もともとウメ，クリからはじめて，うめ干しやジャムなどの加工にも手を広げている。そうやって，すごく稼いでいますよ。

山本　それも，大分県の前の知事の旗振りが重要だったという話になるのかな。

金子　もともとは，平松知事の一村一品から始まっているんだけど，10年ぐらいすると壁に当たるんです。ウメ，クリだけではやっていけないんです。それで必死に全国で似たような，例えば山から15℃の水が湧き出るとか，中山間地で温度差が高いとか，森林に囲まれているとか，同じような条件のところを探して，全国を歩いて，早い段階に長野に行ってエノキダケの栽培を見て，九州ではないので，いち早くエノキダケの栽培で大成功した。柚子とかハーブとか，そういう事業にも乗り出していくんですね。それも，『食から立て直す旅』の中で書いてあるんですが。

アヲハタジャムのジャムの下請けをやって，ちゃんと技術を身につけて，自分たちの独自ブランドで柚子ジャムとか，新しい製品を次々につくり出して，加工品で売っていくということもやっているんです。

ところが，これもやっていくうちに壁に当たる。一戸当たり平均40アー

ルというのは，４反百姓なんで，一番貧乏なパターンなんです。中山間地は，山が切り立っているんです。そうやって作物をつくらせていくと，ロットがみんな小さくなってしまって，通常ルートで売っても儲からなくなってしまうんです。つまり市場というのは，ロットをパーンと出さないとブランドができないじゃないですか。それで10年ぐらいして行き詰まってきて，90年代の頭に，じゃあ自分で売ってしまおうという話になっていくんです。それで流通マージンと運搬費の中抜きを全部やめて，自分たちが直売所を展開していくことになる。

それまで無人の直売しかなかったのに，いわゆる直営の直売所を「木の花ガルテン」といって展開して，レストランを併設する。家族連れで来て，直売所で時間をつぶして，レストランを待って……楽しんで帰っていく。

山本　それは，今あちこちにある「道の駅」のパターンではないか。

金子　だから，それはみんな真似しているんです，そこを。真似しているんだけど，どでかいんです。自己資金70億ぐらい持っていますから。川べりのいいところに，オランダ風の建物みたいなものがダーッと並んでいる。

山本　それは大山町の話ね。

金子　そうそう。川沿いに並んで。

山本　まだ行ったことがない。

金子　補助金をもらわずに，自力で建て替えてね。女性が来たくなるようなレストランで，無農薬の有機野菜でつくったバイキングで，1200円ぐらいで食べ放題。九州中からワーッと自動車で来て，その間に野菜とか，加工品とかを買って帰っていくんです。

そういうふうにして，15億ぐらい売り上げてしまうわけです。そうすると，加工しているところで人を雇い，堆肥工場で人を雇い，直売の事業で人を雇う。おまけに農産物を出荷している農家に売上げの８割がいく仕組みでやっているから，そうすると1000人，2000人は生きていける事業モデルになるんです。そこの中核にいる人たちは，みんなすごく優秀な人達な

んです。

もともと地元の酒蔵の経営者だから，商売の精神がしっかりあって，非常にアグレッシブですよ。農業に対して誇りを持っていると同時に，思想や理念もしっかりしています。

もともと，大分県で下から2番目ぐらいの所得水準の町だった。だから，長年かけて，20年，30年かけてこうなった。じゃあ，赤かぶで今後どういう展開をするのか。かぶ本体をつくっていて，漬物にしてお土産をつくるぐらいは，どこでも直売所で売っている。それを超えないと，村の人口が生きていけるだけのものはできないです。

山本　それは，だから都会の市場と結びつくしかない何かなんだろうけれども，それもやってうまくいくとは限らないしね。本当に。

金子　そう，本当に大変な努力が要るんです。挫折せず続けていくというのは大変なことだし。やっぱり，10年はかかりますよね。収益が上がるようになるまで。

奥只見で，僕はまだ行っていないんだけど，30代半ばの青年が入っていって，おじいちゃん，おばあちゃんを説得して自給野菜を1反，2反つくってもらっているわけです。みんな無農薬でつくっているものを分けてもらうんです。それを，埼玉のスーパーに直送しているんです。そういうのでも十分にやっていけるんですよね。

【外部との交流・結びつき】

金子　王滝村の森林でも，工夫次第です。これからは，バイオマスの発電とかいろいろできてくるから，伐採，間伐材も，それなりにうまくチップでやれるように加工するような工場があちこちにでき始めているし，いろいろな地元の資源をどういうふうに生かして事業を展開していくかというのはやり方次第ですよね。そういう悪戦苦闘していかないと，なかなかいいものはできない。

山本　それを誰がやるか。

金子　そう。やる人材がやっぱり，外から入ってこないとだめなんです。大体地元に変な人がいるんです，ちゃんと。こだわっていたり，すごい技能がある人がいるわけです。山林とか，木工とか，農業とか，そういう人がいる。そこに外から事業センスのある人が入ってきて，掘り起こされてくるんです。それであるところで，事業を展開し始めて，若い人が楽しそうに始めてしまうと，そのままどっと走り出す。

山本　やや無責任な言い方で，一般論的な言い方をすれば，外からの血が入らないとうまくいかないというのは，それはそのとおりだろうと思う。かなり閉鎖的な中では，新しいアイデアはなかなか出てこない。とんでもない変わったアイデアは，そこのことをよく知らない人間が知らないままパッパと言うところから出てくることがあるから，そういう意味でも王滝村にとって重要なことは，木曽福島との結びつきだけでなくて，思い切り遠いところと何かうまい結びつきをつくって。

金子　でも，さっきの交流事業みたいなものはそういうことで，そういううちに元気が出てくるんです。子どもが来るだけでじいちゃん，ばあちゃんが元気になってくるし，何かやろうという気になってくる。不思議なもんです。

山本　変な話なんだけど，最近，九州では，中国からの観光客，韓国からの観光客をあてにしないとやっていけないという側面があって，みんな知事をはじめ一生懸命にやっているんだけど。

金子　北海道もそう。

山本　日本人の中の観光客に頼るのではなくて，思い切って中国のどこかと王滝村が結びついて，向こうから人が来て，王滝村のことをいろいろ知ってもらって，というような突拍子もないことを考えてもいいのではないかと思います。

金子　温泉マニアだから北海道へ行くと，温泉の中の声がみんなハングルだったり，中国語だったりするんだ。びっくりしてしまうよ。

森　スキーなんかも行くみたいな。

金子　雪を見たことがないからね。

山本　台湾から北海道。

金子　長野はだめなんだ。そういうことは全然やらない。

山本　長野は東京に近いから，東京からいっぱい来るから感じないんだよ。

金子　空港アクセスが弱いというのもある。

山本　そうか，空港も松本に小さいものしかないな。

金子　千歳とか，九州，福岡とか，空港があるから，そこからすぐじゃない，車で。羽田から長野までって結構あるよ。だから，なかなか難しいね。

東条　最近は，白馬はオーストラリア人でにぎわっているようです。ニセコがオーストラリア人で飽和状態になったので，白馬のほうが実はいい雪があるということで，最近はすごく白馬が多くて話題ですね。

金子　地球の反対だからね。要するに，南半球と北半球だから季節が逆になるから。

東条　あんなパウダースノーはないという。最近，伊那でも，南アルプスはハングルの看板が多くなってきて，ああいうマイナーな山に登る韓国人も出てきた。王滝は，外国人はほとんどいないですが。

金子　アルプスは，別にマイナーじゃない。千畳敷も含めて。

東条　千畳敷は，中央アルプス。北アルプスに比べるとちょっと。

山本　アクセスが悪い。

金子　伊那は駒ヶ根とか。

東条　ええ，駒ヶ根。駒ヶ根から登る千畳敷は，中央アルプスなんです。

【古い資料の掘り起こし】

山本　東条君のこのルポのほうに戻ってまた聞きたいんですけれど，単に村人からのいろいろな聞き取りとか，あるいは自分自身で観察した議会の様子とか，そういうことだけではなしに，かなりいろいろな昔の文献と

か，図書館とか，あるいはどこかに行ってきちんと調べないと，とてもこれだけのことは書けないなというようなことがいっぱい目につくわけですよ。これはどうやって調べたの。年表をつくるのも含めて，既に出来合いのものがあったの。そういうことではないでしょう。

金子　村の歴史か，何かまとめたものは，必ずあるでしょう。

東条　もちろん，村史はあるんですけど，村史は，例によってあまり役には立たない。もちろん村史も参考にしましたが，一番役に立ったのは，公民館報というのがずっと残っていて，それをひもといて。公民館報をひもといたのが，一番役には立ちましたね。もちろん基本的には聞き取りがほとんど，お年寄りとか。

山本　他方で，書かれたものから再度確認するという作業は非常に重要なので，どういうふうにしてやったのかなと思っていたんだけど。

東条　公民館報が一番多いです。昔の話は。

山本　公民館報というのは，村役場がきちんと保存していたわけですか。

東条　ええ，保存しているんです。役場にあるんです。

金子　長野というのは，結構資料が保存されているね。

山本　長野は，そういう点で優れているんだ。

東条　公民館報を全部コピーしました。大量に。それを臨時支局に置いて，確認はしました。

金子　地租改正とか，農地改革とか，研究に行くと長野は結構資料が残っているって。経済史をやっている人は結構長野にいくよね。

東条　あとはダムであれば，基本的に水資源機構です。王滝の現地の事務所で，非常に取材に協力的でしたですね。ダムのところについては。

森　ダムができるころの話は，水資源機構の資料ですか。

東条　水資源機構です。

山本　これもだから本来，王滝村の話だったのに，愛知県とかその他いろいろなところへ行って調査をしているなということがよく分かるんだけど。

東条　あとは結構手記が残っていたりして，森林鉄道の村民の手記ですね。あと，森林は，もちろん林野庁のほうで調べました。大体役所で基本はすんだかなと思います。

山本　そういう手記も含めて王滝村役場に残っていたわけですか。

東条　手記は，書いている人にもらったりしました。

森　さっきの「満州日誌」も，村役場にあったんですか。

東条　公民館報の中に入っていました。

山本　こういうのは意外に村民の人たちも忘れているし，存在そのものを知らないのかもしれないから，東条君の記事を読んで，「エッ，そんなのがあったの」って，村人は新しく知ったのがかなりあるんじゃないの。

東条　校歌の話は村民みんな知っていると思っていたら，実は知らない人も多くいました。王滝中学校の校歌で３番を歌わないというのが。偶然見つけて。

山本　村民は知らなかったの？

東条　知らなかったですね。この連載企画以外に日々，地域の話題を記事に出したりするので，中学校へ行ったりして，「ああ，そうなんだ」という。何気なしに発見するという。

あと，分野ごとに詳しい人がいました。林鉄マニアとか，詳しい人とか。林業に詳しいおじさんとか，取材していると行き会って教えてくれます。

山本健兒氏

【高度成長を支えた愛知用水】

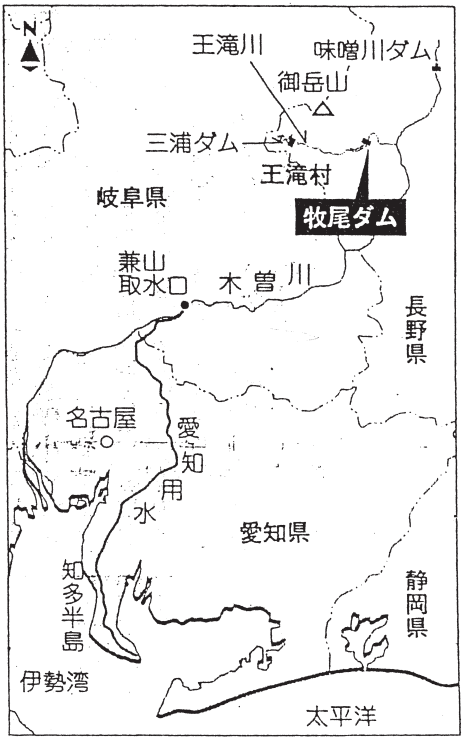
山本　王滝村の話だけど，愛知用水の話が出てきて，今でも記憶に残っているのは，僕が小学校の何年だったか，あるいは中学の１

年だったか忘れたけれども，その当時，習った社会科の教科書に愛知用水の話が出てくるんです。金子さん覚えていない？　一緒のころ習ったはずだけど。（笑）愛知用水というのは，ともかく水不足の知多半島……。

要するに農業用水として開発したというんだけれども，僕はその記憶が残っているんだけど，それが木曽の王滝のこのダムにあるとは全く知らなかった。

他方で，またちょっと意地悪い質問かもしれないけれども，僕は農業用水だとばかり思っていたわけです。東条君の記事には，いわば高度成長を支えた用水だと書いてある。もちろん，あのあたりの農業というのは，農業の中でも先進的な農業であるから，したがってそれだけエネルギー多消費型の農業だと僕は思うけれども，だからそういう意味では間接的に高度成長を支える，高度成長そのものを引っ張ったのは製造業で，その製造業に従事する人たちに食料を供給する農業，そのための愛知用水という意味で高度成長に貢献した愛知用水というふうに書いたのか。それとも，あの愛知用水というのは，農業以外にも工業用水としても使われているのか。

木曽川と愛知用水



（出所）「信濃毎日新聞」2006年５月16日付。

東条　工業用水のほうが。あと生活用水が割合は，比率は忘れてしまったんですが，７割か。

山本　いつごろからそんなになってしまったの。

東条　時代とともに変わって。変遷は把握しきれていない，忘れてしまいましたが。たしか七十何パーセントが，今工業用水または生活用水。当初は農業用水だったんですが。きっかけもそうだったんですけれども，今は変わっていると。

金子　愛知県のここは，みんなトヨタの下請けばかりだよ。

山本　今はそうだよ。

金子　だから，当然そうなってしまうでしょう。住宅地がどんどんできて。

山本　それはそうだ。

東条　牧尾ダムだけで足りないから，更に木曽川上流の味噌川ダムがあとでつくられたんです。ほとんどが，生活か工業用水だったと思うんです。位置づけも，そこら辺は若干はしょった面もありますが。なんか，そんなんで書いたような気が，七十何パーセントがそうだったと思います。

山本　そのような数字もどこかに書いてあったなという，うっすら記憶にあるけど。

森　愛知用水で，ダムの恩恵を受けている愛知県側の人との交流は始まっているという。91年に「愛知用水サミット」があって，お互いに会って，愛知県側の人は，本当に助かって感謝していると言う。上流の人たちは，過疎化してしまって，村もさびれて困っているという話をして，そこで植林というか植樹というか，木を植えていこうという話が出てきて，それは毎年ずっと続いているんですか。

東条　今も続いています。特に木祖村は，すごく盛んにやっています。

山本　王滝村ではないのね。

東条　王滝村は，自分たちだけで豊かだった分，そこまで考えが及ばなかったのかもしれませんが，今後考えて，今もあるんですが，より盛んなのは木祖村のほうが盛んです。

森　そういうのを大事にしていけば，そういう人たちが，先々王滝村

にも来てくれる可能性はあるのではないかと思うけど。

【飯田－三遠南信の結びつき】

東条　そうですね。ただ，どうしてもきれいごとになってしまって。

山本　飯田支社にもいらしたというので聞いてみたいんだけれど，飯田というのは長野市に行くのに不便で，飯田のあたりは，長野は諦めて三遠南信の結びつきでやりたいと思っているようです。ところが，どう考えてもそれは道路をつくるための動きであって。

金子　いや，そうでもない。飯田近辺は，元気な工場はみんなトヨタの下請けです。

山本　たしかに自動車関係の工場があるね。

金子　あるんですよ，多摩川精機とか。

東条　多摩川精機の社長ですか。

山本　多摩川精機はあそこの城主様みたいなものだから。

金子　もともと大田区でしょう。

山本　多摩川精機の創業者は，もともとあの辺の出身なんですよ。

金子　だけど，大田区から工場は引っ越しした。

山本　疎開でね。

金子　そうそう，疎開で来て，そこからでしょう。だから，こっちと結びついてしまっていて，長野の上のほうとは全く切れているという面はあると思う。

山本　それはそうなんだけど。

金子　だから，逆に言えば自分たちの下請けも含めて自動車産業に結びつく産業の集積をしたい，便利にしてほしいという要求があるわけでしょう，飯田近辺の工場の人達は。

森　飯田とか駒ヶ根とか，あの辺ですか。

山本　駒ヶ根までいかない。もっぱら飯田，今言っているのは，三遠南信という。

金子　上伊那地区の駒ヶ根とか宮田とか飯島というところは，農業で一生懸命，特に飯島なんかは面白いことをやっている。あそこは，町全体で営農計画を立てて土地を全部交換してしまうんです。そういう昔からのやり方をやっていて。まだ平野が多いのですが，飯田のほうまで来てしまうと相当山が多くて。

東条　そう，飯田と上伊那は大分違います。両方経験して。

金子　下伊那は農業が成り立つとすれば果樹が精一杯だ。

東条　果物ですね。

山本　でも，飯田まで行くと非常にきれいだよね。

金子　そうだけど，地形がね。大変不利だと思う。

東条　三遠南信はどうなんでしょうね。

山本　一生懸命なのは浜松のほうであったり，豊橋がどれだけ熱心かよく分からないけれど，意外に飯田が熱心ではないなという感じを僕は受けたことがあるので。

金子　そうですか。

東条　あと，ちょっと何とも。

山本　細かいことまで言うと差し障りがあるからあれだけど。

金子　南のほうは，地元の小さい新聞があったじゃない。

東条　ええ，南信州とか信州日報とか，意外といろいろあるんです。

金子　パラパラある。中日新聞も結構入ってきている。

東条　中日も強いんです。

山本　長野県は，ローカルの新聞が強いんだ，本当に。

東条　ただ，ローカル過ぎて，なかなか問題を全国的に位置づけることができない状態でもあります。日々の取材に追われてしまって，それで疲弊している面もあります。

【『民がたつ』とは，閉鎖性を打ち破ること】

金子　多分，この『民が立つ』もそうなんだけど，問題はもう少し複雑

な気がします。さっき，首長のパーソナリティ次第とか言ったじゃないですか。それから，外から刺激を受けたり，外とも結びつかなければいけない。要するに，お上対民という対立図式というのは長野の中の閉鎖的な話で，その中で問題を立てるとそうなってくるんです。よそ者は大嫌いでしょう。

山本　だって長野県人はプライド高いんだぞ。

金子　理屈っぽくて，それは分かるんだけど，問題なのは閉鎖性で，どんどん高齢化して閉鎖的で，お上に対して「民が自立する」といっても，その閉鎖性を打ち破っていかないと，中山間地も含めてだけど農山村は立ち行かなくなってしまう。それが一番大変なことなのに，そういうことができるかできないか。

山本　そういう意味では，飯田はかなりオープンだよね。そういう印象は受ける。

金子　そう？　南はやっぱり違うんだ。信州も全然。

東条　違います。

山本　それは違うよ。信州の中も。何とかトンビに，何とかガラスだとかいうのがあるので。

金子　本当にそうですよ。松本のこっち側と，長野のこっち側と，飯田のこっち側と全然違ってくる。

山本　諏訪はまた違う。

森　『民が立つ』の「はじめに」で，「この閉鎖状況を突き破るのは政治家でもお役所でもない，私たち「民」ではないのか」とあります。

金子　書き出しはすごく美しいんだけど，（笑）これを読んだときにまず考えたのは，これでやっていて出口があるかなという疑問です。

東条　出口はやっぱり教科書的になってしまっているともいえます。

金子　民主主義の教科書みたいに。

東条　読んでいて，そう思います，民主主義の教科書。

【明るく，突き抜けるオープンが必要】

金子　それはよく分かるんですが，もっと明るく，突き抜けてオープンであるということが本当は難しいんですよ。

東条　そうですね。明るく突き抜けてオープンではないんです。それは信濃毎日新聞という会社もそうです。だけども，明るく突き抜けてオープンではないからこそ，これがやり通せたのかな。逆にそうとも思える。

金子　閉塞して高齢化していく中で「民が立つ」って高齢者たちにこれをやってもらうのか，とついつい意地悪く考えてしまう。議論ばかりしていないで，もっと元気よくやれよ，という気分になってしまうんです，逆に。

東条　そうですね。

金子　僕なんかはね。いろいろ見ているので。

東条　そういう感覚は，僕は長野県には就職して初めて来たんですけれども，日々感じていますけどね。

金子　西のほうがそういう意味ではオープンだよね，西日本。崩れるのも崩れていますけど，中山間地は。特に四国と中国山地はめちゃくちゃだけど，それでもオープンな仕組みのあるところは，元気になり得る可能性があると思うんです。

今，問題なのは，閉鎖的に，何でも内々の論理で動くことです。お上任せになってしまったのは閉鎖的だということなんです。一人優れた人がいると，その人がやる。お上任せの真ん中に，そういう優れたリーダーがいると，それが結局，そういう枠組みを維持することになってしまうので，またみんなお上任せになってしまう。いろいろな人が，出たり入ったり自由にできる社会でないとなかなか。

森　王滝村は，その典型かもしれない。

金子　中山間地は難しいんだけどね。誰もが入ってくるわけではないから。

山本　それはそうだよ，農山村は。なんて言ってすましてはいけないけ

ど。

金子　だけど，アイデアは，そう簡単に中からは生まれないと思う。

東条　でも，閉鎖的であまり突き抜けないけども，それも地域性で，ある意味，それを大切にしている良さもあると思う。くそ真面目に考えて，くそ真面目な記事を書いて，それを読む人が一応いる。それが成り立っている世界は，それはそれでありかなという気もします。

金子　議論するけれど，最近の村井知事を見ていると分かるけれど，公共事業ばかりやって，ほかに何か考えろよ，産業を起こせよと思うんだけど。実は，僕は田中県政にもそう思ったんだけど，最大の罪は，吉村県政でぼろぼろになった財政を立て直す名前でショック療法ばかりやっているだけで，どうやったら生きていけるかというモデルを示せなかったことです。

東条　そう思います。

金子　その反動で何が来たかというと，また公共事業をやりましょうという人が来て，この財政状況で。「破綻するしかないじゃない」という路線に突っ込み出している。吉村県政でお上頼み，田中県政でショック，また村井県政という，本当の意味でオープンに何か業を起こしたり，稼いだりする所へ行かない。来るのはセイコーエプソンにしろ何にしろ，長野は疎開企業だけが頑張っているだけで，何かつくり出していないんだと思う。

山本　ちょっと待った。それはちょっと認識が不正確だぞ。

金子　同じように外から来てもらうというのは，それなりに刺激にはなるんです。

山本　何の認識が不正確かというと，疎開に起源はあると言ってもいいんだけど，セイコーエプソンは，服部時計店に勤めたことのある地元の人間が地元で起こした企業がエプソンになったんです。この人は，第二精工舎の下請を戦前に開始し，この企業と，疎開してきた第二精工舎諏訪工場とが合体して諏訪精工舎が成立したんですよ。これが後にセイコーエプソンに発展するんであって，エプソンは単純な疎開企業ではない。

金子　そうか，そうか。

山本　だから，実はセイコーとは無縁と言ってもいいんだ。あれは地元の人間が，名前はセイコーと結びついて，地元で成長し，そのうちセイコーとは完全に違う分野に入っていったわけです。ずっとそのまま本社はそこに残して。とはいいながら，製造機能はあそこからどんどんなくしてあちこちに散らばらせる。諏訪精工舎の下で育ったいろいろな下請けに,「お前たちは自分の力で生きろ」と1980年代半ばごろに言いわたした。今までの諏訪精工舎の下請けで生きてきた中小企業に，もうこれからは無理だから，自分で生きろと突き放したところから，今の諏訪のあたりの経済がつくり出されてきた。

東条　突き放されたところは元気ですよね。上伊那にもその関連の。私も上伊那に来たばかりであまり企業の名前は覚えていませんが，幾つもあるんです。派生したところが。結構，独自の技術を持って，ちゃんと雇用を維持している。

金子　元の企業はそうかもしれないけれど，その後，生き残ったのは当然みんなそうだとして，じゃあもう一回ショックじゃないけど，何かがこないとそれは自滅しかないんじゃないだろうか。中山間地は特に。

山本　中山間地はそうだけど，他方でついでに諏訪の話をすると，あそこの中小企業あるいはセイコーエプソンそのものもそうだけど，要するによそから結構人を吸引しているんです。あの中で事業を起こして，そこに定着した中小企業者は結構いるんです。僕はあそこに数年間通って，いろいろ勉強したから少し知っているんだけど。

森　そうすると知事ではだめなんだ。知事が来て，脱ダム宣言みたいなことでバーンとやって。

金子　公共事業をやるかやらないかでぶれているだけだもの。建設業を除けば，企業家はそういうような人とは全然関係ないところで生きているんだもの，まさに。民（タミ）ではなくて，民（ミン）は勝手に動いている。

森　民のほうは，国策に，少なくとも脱ダム宣言で反旗を翻したところで，何か変わるのではないかと期待を持ったわけでしょう。期待はそのとおりにいかなかったんだけど。要するに，国の政策が必ず正しいのではないことは，あちこちで歴史的にも，さっきの話で毎日新聞の話もそうだし，昭和の大合併でも，その結果どんどん過疎化していった事実があることも，民のほうが田中よりかは知っている。

金子　甲乙ではなくて，丙丁つけ難いみたいな（笑）。実務能力や将来を見据えた人で，もう少し革新的な人，斬新なことを考えられる人というのはいくらでもいるはずなのに，極端な壊し屋か，極端な守旧派か，どっちかしか来ないというのはどういうことなんだ。

山本　それは私は知りませんけどという，長野県知事……。

金子　企業が勝手に生きているという，そういう世界なんだ。

森　そうなっているんだよね。

金子　輸出しているから地元なんか相手にしていないんだよな，結局は。よく考えると。機械組立，精密とかいうのは。不思議な世界だ。

【どうしたら展望が開けるのか】

森　どうしたら展望が開けるのか。

山本　展望は難しいね。

森　『民（たみ）が立つ』は2007年の新聞協会賞，東条さんのルポルタージュは2006年の農業ジャーナリスト賞，社会的に非常に評価されている本ですけれど。

森　廣正氏

金子　こんなに密着

して取材しているものね。

森　ええ。非常に丁寧に。

金子　非常に丁寧にやっていると思う。時間がかかっているから。価値がすごくあることはよく分かる。見た感じで言ってしまいましたけど，これだけへばりついて取材するというのはそうないですよ。

最近，医療や介護施設を回って分かりましたけど，深夜の介護現場に付き合ったんです。わりと有名なところなんです。有名なグループホームなんですけど，「深夜までいたのは，あなたが初めてです」と言われました。

森　徹夜で付き合ったというのはね。

金子　官僚とか学者とか来るけれど，昼間，事務所で話を聞いて，現場を横からポッと見て，すぐ帰ってしまうというのが普通みたいです。やっぱり見えるものというのは，その時点で限定されてしまう。向こうも深夜まで付き合ってくれると認知症の人が徘徊するのに寄り添って，夜中もずっと起きている介護士がどういうパターンでやっているか初めて見えるわけじゃないですか。一応理屈は分かっているけれど，理屈とはちょっと違う。感覚的なものもありますよね。相手のしゃべりも違ってくるし，だから住み着いて10か月とかいうと，私が一晩認知症の人を見たという話とは全く違うから。そうしないとディテールは見えてこないし。

自分も農村のルポルタージュに近いような分析をやったんです。学問ツールでは見えないものを見るために。同じ所に４，５回行くんですよ。２，３日ですけど。話を一つ聞くんだけど，その人の流れで聞いてしまって，そのまま書くとちょっと危ないなと。

山本　危ないよ，それは。

金子　やっぱり人なんですね。人間関係というのはなかなか見えてこない。実はあいつはこうで，ああでというのが分かってこないと，話がフェアに書けなくなってしまう。ちょっと逡巡してしまうこともあって，それでも怖いから。

都会にいると客観的にデータ中心に何か書いて，乾いた人間関係を想定

して書いてしまっても，それでスッと終わってしまうケースがありますが，それは特に地域の場合はすごい難しいなと思うな。

山本　知りすぎると書けなくなる。そういうことがいっぱいあるのではないかと思うんです。

東条　その繰り返しです。知りすぎて書けない。

森　本当に信頼されると，書けないことまでしゃべってくれるからね。

山本　だから書けなくなるんです。

森　東条さんは，そういう場合があるでしょう。

東条　毎日その繰り返しですけど，この場合は特にそうですよね。知りすぎて分からなくなってしまうという。

金子　冷静な客観的な分析の枠組みがどこかへ行ってしまうんだね。人の流れや何かで，すごいくだらない対立だと僕には思えることで決まっていたりとか。

東条　くだらないことで本筋が決まっていってしまうことがときどきあるので，それを俯瞰して見ると，また見えたりするんですけど，そこまで知ってないとまた書けない。

金子　知ってしまうと書けないという繰り返し。難しいよね。すごいな，あなたは。

森　そうですね。この中から，何か出てくると思うんだよね。書いた事柄から。

金子　「民が立つ」というのは，さっきも言ったように閉鎖性の中で「民が立つ」では意味がないと思うんです。持続しそうもないと思うんだけど，何か切り口がないと，雑多なものがワーッと入ってしまう中で整理できない。ドロドロとした記述になってしまうので，ある枠組みの中で今の状況を記述したらこういう，お上に頼るのではなくて，普通の人が実際に声を上げなければいけない状況だという状況認識だけで切って統一感がないと，読むほうがつらくなってしまうんだろうね。バランスが難しいですよね。

東条　そうですね。

森　書かれている中身を，もう一回読むと何か出てくるような気がするというのが僕の印象なんです。こういう例がある，ああいう例があるということが出てきますね。愛知県の例が出てくる。それが王滝村にどのように関係して有効化できるかどうかが，もう一歩出てきていないんです。「あそこはああだ」，それで終わってしまっているからもったいないと感じたのと，『民が立つ』の最後のほうに，第３章「克服」の中ですけど，王滝村で2006年９月に「水と緑のふるさと基金」をつくったというのはご存じですか。

東条　はい。寄付制度です。

山本　東条君もかかわっているのではないですか。

東条　いや，直接にはかかわりません。僕がいるときにできて。それなりに集まってはいるようですね。

森　そういうものを活かしていけないのかな。

【地方のマスコミの話から】

森　もうそろそろ時間もよさそうなので。

山本　結論はないけど，信濃毎日新聞も少し褒めておきたいですね。結局は半年ぐらい住んでいたわけですか。

東条　10か月です。

山本　そのときに本来は本社勤めのはずなんだけど，10か月現地に行って調査に専心させてくれた信濃毎日新聞もなかなか度量あるよね。というふうに僕は感じたんです。

東条　度量ありますよね。地方のマスコミの話をすると，ほんと日々大変なんです。田舎だけど，それなりにいろいろある出来事で，毎日毎日紙面を埋めなければいけないんです。保育園児が，農業体験で頑張っている記事も書きますし。

例えば今，上伊那だとまさに金子先生が言われた医療の話が今一番のト

ピックです。医師不足でどうなるんだという，その医療の話と，あとゴミ問題の話とか，農業の話も含めてほんといろいろあって，その紙面を毎日つくっていかなければいけないというので疲弊してしまって。それが引いて見てどういう位置づけなのかを考える余裕がない状況です。しかし，少なくとも『民が立つ』のときだけは，遠くから見て考える作業に一人割いてくれた，給料を払ってくれた，そういうセッティングがありがたいです。

逆に，僕は毎日の記事を効率よく書くのが苦手で，（笑）どちらかというと，ポンポン記事が出てこないやつだと思われて，こいつは長いこと考えた上でやらせてみようと緩く見てくれました。

山本　そのあたりで，僕はなかなかすごい新聞社だなと実は思っていたんです。

東条　10日ぐらい，全く会社と連絡をとらなかったときもあったんです。上司というか，デスクに全然電話もしないし，今日何をしているんですと報告もしない。名古屋のほうに行って取材して，経費は請求してという。（笑）そういうのが10日ぐらい許される，何も言われないという度量は，確かに会社としてはすごいなと思う。

森　編集長の度量ということですか。

東条　そうですかね。

山本　そういう裁量権をどのレベルで持っているのか，よく分からないけれども。

金子　広告収入がなくなっているから，地方のメディアは大変です。新聞もそうだし，テレビ局も，アナウンサーが，自分でカメラを担いで自分で撮るみたいです。だから，日々の事件を追いかけているだけで儲からない部分はカットだから。

昔は，ドキュメンタリーで優秀な番組をどんどんつくれていたのが，今ほとんどできなくなっている。地方の不況や地域間格差がひどいでしょう。広告料収入がどんどん落ちてしまうから，結局，ゆとりがなくなって腰を据えた報道はほとんどできなくなってきているのが実情だと思います。

東条　まさにそうなんです。みんなやらせればある意味能力はあるんです。上伊那にいても，まさにそうですね。地元の小さい新聞もそうですけど，毎日の出来事に追われてしまって。読者にはそのほうが受けるものですから。うちの息子が出たイベントが，紙面に載っているかいないかで，買う買わないは決まってくる。いかに読者に密着した日々の出来事を書くかは問われるし，要求もされるので，それだけになってしまって，ではその地域はどうなんだというのは結局書けない。日々感じているんですけれど。

医療問題にしても，病院に行ったら問題を感じるわけです。医師不足の現場があります。しかし，その現場を全体の問題意識の中で位置づけるところはなかなかできない。日々過ぎてしまって，終わってしまうことが多いんです。そういうストレスがすごくあります。

山本　そういうことを本来，我々がきちんとやらなければいけないんでしょうけれど。はからずも東条君がこういうルポでやってくれたし，それを読んでいろいろ勉強できたので，私は感謝しています。

森　卒業生がこれだけ頑張ってくれている。

【現実を知ることが，出発点】

金子　学問的な分野でフィールドスタディというのは，経済学は特にそうだけれど，成り立たなくなってきていますよね。

山本　それはそうだよ。だってこんなに忙しいんだもの，まとまった日数をとって出張できないんだよ。（笑）

金子　例えば，労働経済でいろいろなモデルを使って分析しているものは，ほとんど説明になっていないというか，実際の現場を全く知らないのが結構行き交っている。昔は，逆に工場にへばりついて。

森　工場調査をやって，そういうのが多かったね。

金子　ずっとそういう調査で今どうなっているのかという研究があったけれど，今すごく希薄になってきているでしょう。どうするんだろう。学

問は，何にも役に立たない。現実離れしているから，それでいいのか。みんなが知らなきゃいいんだ（笑）。

山本　観察し，人から話を聞き，その人も特定に限るのではなくて，いろいろな人から話を聞き，もちろん理論と付き合わせて，どっちが当たっているのか，間違えているのか考えるという作業をするということは僕は重要だと思うんだけど。

金子　僕は医療現場に行くと，ゲーム理論に基づいて，情報の非対称でモラルハザードを防ぐためにインセンティブでやりましょうという主張がほとんどなんだけど，「行ってみなさい，病院へ」とか思いますよ。どんどん病人を追い出して，そこで死にそうになっている人とか。知らないから，そういうピンボケな議論を，これが正しいのだと胸を張って書く。

山本　医療経済学……。

金子　知らないから書けるんだけど，何も解決しないでどんどん世の中を悪くしているという罪悪感もないんだね，知らないから。すごいことだよね。

昔は，ジャーナリズムがそういうのを大量に提供してくれたから，みんなが共有する現実認識があるから，無茶なことは言えないというのはあったんだけど，それもないじゃない。

山本　そう？

金子　学者もフィールドスタディをそんなにやらなくなってきているし，評価されなくなっている。だから，そういう中で学問が浮いてしまっているみたいな。

学生も昔，地方から出てきたり，自分の親がどうだったりという実感を持ってやっているんだけど，大学に入れるやつは一定の所得以上だし，実態とそれほど関係なくなってきているというのがあるじゃないですか。現実そのものを知らないという意味では，先生も学生も同時に知らないということが進行しているという，すごいことだなと思います。気がついてみたら『蟹工船』を読んでいるやつが30万人もいるとか。（笑）どうしちゃっ

たんだろう。

森　20万部以上増刷しているというでしょう。それだけ現実が，いかにひどくなってしまったかということ。

金子　労働経済学も，大企業が巨額の内部留保をこんなにためて，配当をばんばん出し役員報酬は上がっているのに，規制緩和していかないと雇用は増えないんだ，問題はミスマッチだと平気で書いたりするという，どうしちゃったのかと思います。こんなこと言うと，また反発買うけど。でも，正直そういうふうに思いますよ。

森　この間も，毎日新聞（「派遣労働を考える」－まるで「アリ地獄」2008年７月７日付夕刊）に書いていたからいいじゃない。本当にそのとおりですよ。

金子　正直，どうしてああなんだ。モデルを考えるのはいいけど，現実に起きていることに対していかに犯罪的かということが分かっているのかと思います。

森　分かっているのかね。

金子　少なくとも現実を知っている人に話を聞いたほうがいいと思う。そういう意味で，ジャーナリズムの役割が大事なはずなんだけれど。

山本　お説教くさいですか。（笑）

森　もう少し分かりやすくね。

金子　分かりやすくというか，「民が立つ」という切り口が……。

山本　ステレオタイプ化していますか。

金子　さっきも言ったけど，こうせざるを得ない，長い取材の枠組みをつくらないとバラバラになってしまうので，そういうのは分かるんだけど，もうちょっと違うかなと思うことがたくさんあるんだけど，とりあえず起きていることをフェアに伝えるとか，事実を伝えるということは大事なことで，そういう仕事がどんどん減ってきているということは大変なことだと思っています。

森　読んだ人は，読んで，感じて，判断して，そして動いてくれれば

を期待しているみたいですね，それなりに。

金子　長野県民で一生懸命動いてくれる人を励ましているんだと思うけれど。

森　そろそろ時間も。山本さん，何か。

山本　もうそろそろ終わりにしていいと思いますが，東条君もこれに終わるのではなくて，日々忙しくて，それで疲れ切っている様子が何となくうかがえるんだけれども，信濃毎日新聞はきっと度量のある会社だから，また別の機会が巡ってきて，それは東条君だけではなくてほかの社員もそうだろうけれど，我々に知らないことを教えてくれる，いろいろな事実を提供してくれると本当にありがたいなと思います。

森　それを，我々も期待しています。

まとまらない司会で，すみませんでした。今日は，ありがとうございました。